

「私はちゃんとみている、」

山田えみこ

人物

岡田真己（お） 会社員、部長職

岡田信彦（しん） 失業中

○自家用車の中（夜）

走る自家用車。

岡田信彦（49）が、あざやかにハンドルを切っている。

通り過ぎるカーブや、車を華麗にかわしていく。

助手席には、岡田真己（48）が、座っている。

対向車線の車の光が、信彦と真己の顔を照らしていく。

真己「長い間、患っているわね」

信彦「もう、ほんとに長いな」

真己「コロナの後遺症で、鬱、3年。それから、腰の怪我で3年」

信彦「本当だ」

信彦は、器用に胸ポケットから煙草を取り出し、くわえ、ライターで火を点ける。

腰の痛みに顔をゆがめ、手で腰を抑える。

真己「あら、やめたんじゃないやなかったの？煙草」

信彦「……」

真己「焦ってるのね。再就職」

信彦「ああ、俺は、お前とは違うからな」

交差点で、右折のウインカーを出し、止まる。

信彦「俺は、お前と違う。お前は、才能がある。今じゃ、お前は、上場企業の部長だ」

わずかな対向車線の車の切れ目を見逃さず、信彦は、素早くハンドルを切る。

真己は、思わず、手付きに（感心した）というような視線を信彦に向ける。

信彦「さぞ、何十人も部下を操るのは、気持ちいいだろう？」

信彦、車のスピードを上げる。

信彦「俺は、何の才能もない。元から、駐車する車を取り締まる、監視員になるしかな

かった」

真己「……」

信彦「俺は」

真己は、深いため息をつく。

真己「あなたは、変わってしまった。昔は、
そんなんじゃないかった」

信彦「昔から、どうだったってんだよ!？」

信彦は、真己を見、怒る。

信彦「俺には、学歴もない。何の才能もない!？」

真己「……」

信彦「どうしようもない、落ちこぼれなんだよ」

信彦、ハンドルを叩く。

真己「……」

信彦「6年間も、お前に食わせてもらってる、
くさった奴なんだよ！」

真己「……」

車を、走らせ続ける

信彦、対向車線の車が、近隣のガソリンスタンドに入り損ねているのに素早く気が付く。

バックミラーを、ちらりと見て、後続

が疎らなのを見て停車し、ライトをちかちかと合図する。

対向車は、有難そうに、車内からお辞儀して、ガソリンスタンドに入っていく。

その後も、信彦のハンドルさばきは、ずっとあざやかに続く。

真己「信彦……」

信彦「……離婚しても、いいんだぞ」

真己「……」

信彦「そろそろ、離婚してもいいんだぞ」

真己「……」

信彦「俺なんか、……俺なんかから、そろそろ、自由になれ」

真己「……」

信彦「お前みたいな女が、いつまでも俺と一緒にいていいはずがない」

真己「……」

信彦「俺なんかと、何故、結婚した……」

信彦は、震えている。

真己「信彦、覚えている？」

信彦「？」

真己「あなたの判断は、いつもの確よ？道で脳内出血で倒れるお爺さんがいるときも」

信彦「……」

真己「意識レベルを判断し、的確な処置だった。おかげで、あのお爺さんも、すごく元気」

信彦「そのくらい、監視員や、警備担当なら当然だよ」

真己「……」

真己、走る車窓から、外を眺めている。
ふうっと息をつき、

真己「健やかなるときも、病めるときも……」
信彦「……」

真己「私ね、あなたを見つけたとき、ダイヤの原石を見つけたみたいだった。監視員でありながら、歴史や政治、経済のことに、とても詳しい。確かな情報収集能力。そして、的確な判断力」

信彦「……」

真己「知ってる？あなた、こうしている間にも、的確な判断力を出し続けているわ」

信彦は、目を見張り、行く手をみつめている。

真己「初めて、ドライブに連れて行ってもらったときも、あなたの的確な判断つづきにびっくりしたの」

信彦「……」

真己「あなたは、自分に気が付いてない。た
だの……ちがう、ただの人じゃない。職を
失ってから、ずっと努力を続けてる。た
だ、自信を無くして……」

信彦「……ずっと」

目を見開いたまま。

信彦「ずっと、見ていたんだな」

真己「……」

車が、海岸線に出る。

信彦「……ずっと」

真己「あなたは、ただの人じゃない。何か、

道があるはずよ」

信彦「ずっと、俺を見てたんだ」

信彦の目から涙が溢れる。

見つめる真己。

夜の海岸線を二人を乗せた車が、ひたすら走って行く。

信彦「ずっと、俺のことを見てたんだ……」

走り続ける車。

おわり